

43 【まんだらけ】

「まんだらけじゃ、まんだらけじゃ」

村の若者が、涙と鼻水と涎をたらしながら、血相（けっそう）をかえて走ってゆきます。

「いやらしい名前じゃのう」

完ちゃんがいいました。

「まん、だらけ、か。いやらしいおぼけじゃのう、おぞましいおぼけじゃのう」

ぼくも同調（どうちょう）しました。

「【まんだらけ】は、どうかんがえても、おぼけじゃのう」

こんどは完ちゃんが同調しました。

「何いうとる。曼陀羅華（まんだらげ）は、天上に咲く花の名前じゃ。ありがたやありがたや」

母親が手を合わせます。

「金ちゃんのおかん、かんちがいしとる。まんだらげ、じゃのうて、おぼけは、【まんだらけ】」

完ちゃんに笑われました。

ぼくの母親は、教養（きょうよう）がない。

[け]と[げ]は、毛一本のちがいではなく、毛二本のちがいだ。母親を莫迦にしながら、懐爺のところに行きました。

どは

どひ

どふ

どへ

どほ

これは、めったに、大きな笑い声をあげない、懐爺の大笑いです。

ぼくも完ちゃんも、いっしょに大声で笑います。

「金ちゃんのおかん、あほや、あほや」

「わしのおかん、ぼけた、ぼけた」

すると、懐爺の大笑いは、突如（とつじょ）としてとまり、

「阿呆で惚けは、金、完、こん」

「【きんかんこん】って、どんなおぼけじゃ」

「それは、別名【じぶん】というおぼけです。金ちゃんのお母さんは、賢い人ですねえ。【まんだらけ】はたしかにおぼけですが、【まんだらげ】ともいうんです。【まんだらけ】の〔け〕を金ちゃんたちは、〔毛〕だとおもっているでしょう、そうではなくて〔華〕と書くんですよ」

「毛でなく、華かい。なら、おぼけじゃねえなあ。かいじいはすげえのう」

完ちゃんは感心しています。

「おぼけじゃねえのう。すまんのう、おかん」

ぼくも感心し、反省もしました。

「いえいえ、おぼけ、立派なおぼけ。【まんだらけ】は、見たこともない美しい華です。見たこともない美しい華が、おぼけでないはずが、ないではありませんか」

懐爺は断言しました。

「そんなもんかのう」

ぼくには意味がわからない。

でもこの世には、懐爺いわく、

「わかることよりも、わからないことのほうがおおい」

らしいから、まあいいか。